

能

能への道しるべ ～伝え継ぐ心～

能とは

① 能と狂言で能楽

能 - 舞・謡・囃子から成る **歌舞劇**
狂言 - セリフ劇・喜劇

② 室町時代初期の人気役者、

観阿弥・世阿弥 父子が大成

③ **能面** を使う、仮面劇

④ 神・精霊・幽霊・鬼・怨霊など魂を慰める、
祈りと鎮魂、祝祭 の芸能

⑤ 抽象的な所作でイメージに

訴えかける所作、**型** の芸能

⑥ 謡や舞の実技が武家社会の中で

心身鍛錬 に



喜多流大島能楽堂



昭和46年、福山市光南町に建設。定期的な能の公演のほか愛好家の発表会、能楽の講習会など能楽普及のための拠点となっている

謡ってみよう 「高砂や」 高砂より



船に帆を揚げて此の浦船に帆を揚げて月
 諸君よ生で潮の波の淡路の島影や遠く鳴
 尾の沖過ぎてはや任の江に著きよけりは
 任の江に著きよけり

待謡 脇連 高砂や此の浦

謡(うたい)のポイント

- 丹田呼吸 →息を深くして肚に力を溜める
- 地声で謡う →のどに力を入れずに声を遠くに
- 言葉を大切に →日本語をきちんと発音する



精神を落ち着かせ、活力を生み出す効果

謡ってみよう 「高砂や」

高砂より

たかきごやー
 このうらぶねにほをあげてー
 このうらぶねにほをあげて
 つきもろともに いでしおの
 なみのあわじの しまかげや
 とおくんなるおのー おきすぎて
 はーあや すみのおえにーつきにけり
 はーあや すみのえにーつきにけりー

船に帆を揚げて此の浦船に帆を揚げて月
 諸共よまで潮の波の淡路の島影や遠く鳴
 尾の沖過ぎてはや任の江に著きけりは
 任の江に著きけり

待謡 脇書き 高砂より 此の浦

宮島 厳島神社能舞台(国重文)



毎年、4月16日から3日間、桃花祭御神事能が催されている

能舞台平面図



宮島 巖島神社での能の歴史

大内氏の時代

天文年間(1540年代)渋谷太夫という者、山口から上洛の途中に法楽として能を行う(巖島野坂文書)

陶氏時代

天文20年頃?(1550年頃)摂津の傀儡が九州の帰路に立ち寄り演能した(巖島野坂文書)

毛利元就の時代

永禄6年(1563)を始めとして度々奉納(高舞台にて)

永禄11年(1568)には観世大夫が下向した際「江の中に舞台を張らせて九番の演能がありその後、**棚守房顕**の屋敷で舞台を張らせ十一番を演じた」

(房顕記)

その後も毛利時代を通じ、度々能が行われている

島民など**地元**の役者を養成することにも力をいれていた

宮島 巖島神社での能の歴史

浅野氏の時代

元和5年(1619)から巖島に藩直属の宮島奉行、宮島元締役などが置かれた。福島氏、浅野氏の時代を通して能が行われていた。(巖島神社)

宮島には春・夏・秋三期の市も立ち、神社を中心とした観光地の性格を帯びるようになり、次第に賑やかさを増していった。

江戸時代半ばには**旧暦3月15日の桃花祭翌日**から巖島所属の能楽師および島民による法楽神事能として年中行事となる

明治以降

新暦となり、従来の3月15日を1ヶ月遅れの4月15日(桃花祭)にして、16日から3日間を**桃花祭御神能**とした。

桃花祭御神事能は**300年以上**の歴史ある行事となった

喜多流の歴史

十四世宗家 喜多六平太(1874~1971)

明治維新後の喜多流を再興。
多くの功績により初の人間国宝となる。
大島家では、初代七太郎、二代寿太郎、三代久見
が師事



喜多流 流祖 喜多七太夫
徳川二代将軍秀忠の後援により、
一流の創設を認められる



能の大成者 世阿弥

「初心忘るべからず」 「離見の見」
「男時 女時」

室町時代、将軍足利義満の目に留まったのは12歳
の時と言われる
以後、時代の寵児として華々しく活躍

父・親阿弥の跡を継ぎ、申楽能をより芸術性の高い
幽玄の芸能へと発展させたが、
晩年になって佐渡島に流されるなど、不遇のうちに生
涯を閉じる

波乱に満ちた生涯を通じ、芸を次代へ残すこと、
普通の花を追求した

芸術論を唱えた「風姿花伝」、「華鏡」、「申楽談義」
など、芸道のみならず人間が生き抜く心構えを説いた
書として現代に通じる言葉を多く残した。

